

2024年9月総評 暮田真名

運転の果てに喉から出棺ホーン

青粒

「出棺ホーン」とは霊柩車が出棺時に鳴らすクラクションを指す。もちろんお別れのあいさつなので悲しいことだが、響きが「バツカルコーン」みたいで楽しげ。最初は車と別のものであったはずなのに、最後には車そのものになってしまう恐ろしさ。

働いて生きるというのは楽しそう

午後から天気が崩れてきそう

香取小春

晴れていたと思ったら、雲が出てきて雨が降る。天気について人間ができることはほとんどないとされている。一方で、就労については自分の力で未来を切り開いていける、ということになっている。これら二つを並列し、「～そう」という他人事のような語尾で締めることで、「主体性」への疑い、現実の遠さが伝わってくる。

うまれおちたその瞬間から

あたしのなかのテレビ局

白鳥の湖

ハバカリ タケヅ

バレエの演目「白鳥の湖」を映しているテレビが生まれてこのかた心のなかにある、というほどの意味だろうか。「テレビ局」という語によってニュース、ワイドショー、テレビショッピング、ドラマ……を映している他のテレビの存在がほのめかされ、「白鳥の湖」の浮世離れしたおもしろさが引き立つ。

ぼくたちがぼくになってから

半年が経って

ぼくはぼとくになった

橋口 諒介

二人かそれ以上かわからないが、とにかく複数人が一人になった。と思ったら、また複数になった。という、絵本のような詩（谷川俊太郎『もこもこもこ』のような絵が浮かぶ）。複数だった頃を真似るように分裂した「ぼ」と「く」が愛らしくも切ない。

分岐するくらい賢い犬

立花ばとん

最初に連想したのはマルチバースで、ふつうの犬は--犬でなくても--幾通りもに分岐した未来のうちの一通りしか見られない。しかしその犬は並外れた賢さのために、他のルートを選んだ場合の姿も見えてしまう、というような。もちろん、言葉のとおり枝分かれした犬というキメラも背景に見え隠れしている。

ぱき(君がはじめて海を

知った音)

ざく(乱暴に約束する音)

清水 大稔

丸括弧が詩的な装いのためではなく、わたしたちがSNSでするような砕けた仕方での補足のために使用されているように見える。「ぱき」というなにか薄くて硬いものが割れるような音、「ざく」という肉感のあるものを刃物で刺すような、あるいは霜柱を踏むような音が補足の内容とまったく噛み合っていないことによって、奇妙な緊張感が生まれている。

沸騰をつづけてくれてありがとう

桜庭 紀子

いったいなにに感謝しているのだろう。おそらく水（お湯）に感謝しているのだと思うけど、沸騰とはさかんに水が気化している状態なので、感謝の対象がどんどん消えていくというおもしろみも生まれている。

ダビデ像その内側の管理人

平松 泥沸

不思議と視覚的にイメージしやすいのは、人型のロボットを操縦するアニメのおかげだろうか。ここで言われているのは操縦手ではなく「管理人」なので、動きがなく、「静物」である銅像のイメージにぴったりだ。きっとダビデ像の目は窓なんだろう。

ぐりを節約してぐる

牛田 悠貴

『ぐりとぐる』。正直なところどっちがぐりでどっちがぐらだかわからないほど似ていて、対等であるはずの二者関係に、突如「支払うもの / 支払われるもの」という無惨なまでの序列が持ち込まれ、あまつさえ、節約しているという。めちゃくちゃ笑いました。

イマフレを連れて三途の川渡る

小里京子

イマフレ？ ……「今際フレンド」ってこと！？ 「フレ」という言葉がだいたいかがわしいニュアンスを含んでいるせいで、一緒に三途の川を渡る関係の友達（？）も、なにか人に言えない秘密の関係であるかのような気がする。心中の相手と考えると、秘密の関係ではあるのか。